

# 方向

第一一三号 一九九〇年四月二五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人、大塚五朗 (四)

小学校教員時代

1930.4.5. 原田憲雄

一九一八年(つづき) 五郎、二十一歳。四月から、福島県石城郡上遠野小学校の教諭として勤務。歌集『山原』は、この年の作品からはじまる、最初の五章を「福島在住時代―その一―」と名づける。

海潮音

大正七年七月福島県四倉の海岸に遊ぶ。四倉は鯉の好漁地なり。

潮させばみな一斉に飛ぶかもの羽音さやけき海には来しか

ここだ群るかもの羽竝の光るなべ砕けて白きみなわをみたり

夕づく日鯉をさげてゆく男ひかりをうけて素裸体なり

満船の鯉うちあげ夕陽の中漁師はまるくならびたるかも

陽にくさき鯉の骨(あら)が乾されたり浜たんぼの咲く砂山に (山原 一三)

友の家は海岸を去る一里の山中にあり。夕暮その友の家に至る。

大空の星は流れてわが乗れるところは淋しく山越ゆるなり

馬が牽くところを淋しみ月のてるこの山峽を越えにけるかも

山いくつ越えて来しかもこの家に夜目にもしるく向日葵さけり（山原 四五）

ここで前後するが、五郎を短歌に誘った二人の友、Yと佐藤嘲花について記した文章を引いておこう。

どんよりと空は曇りて向つ田に馬が代掻く野茨の花

六月！ 私にはこの歌が、そしてこの歌の作者が髣髴として目の前に浮んで来る。どこか重苦しい、そのくせ心は妖しげなあこがれに濡れてゐるやうなこの歌が、限りなく私を悲しませるのである。少年の日の酸く甘き思ひ出が一筋の涙となつて頬を伝ふのである。

その時既に親の無かつた私は、これも親のない友——Yと加速度的に親しくなつていつたのは、同病相憐れむことの深かつたによること勿論であつたが、どこか水のやうな寂しさをいつも身から離したことの無いYの姿が深く私を捉へたのであつた。丈がほんとに驚くべき程高く、しかもその肌はいつも螢光をたきこめたやうに青白く透きとほつてゐて、小さい時に傷められたといふ右の目が、死んだ魚のやうに白く濁んでゐた。

さうしたことが自ら人との交りを狭めたのであらう、いつも一人校庭の片隅で呆然と空を仰いでゐたり、蟻が毛虫を引張つて行くのをじつと見てゐたりした。

「やあ背高のめつちかち。」

時々友達があびせかける悪口を、私は私自身のことのやうに腹を立てた。さうした少年らしい正義観めいたものが、私をして彼に近づかした一つの原因であつたかもしれない。

東北の冬空は本当に重くて暗い。それでも門川が雪解の水を溢れさせ、遠い山に野火が這う頃ともなれば、春の淺黄の空がぼつかりと人々の心に灯をとます。それはひもじいがたのしい灯りである。しかしやがて花が青葉に置き換へられ、季節が雨の道をひらく五月・六月の頃ともなれば、空は再び憂鬱な瞳を重くふせる。丁度少年から青年に移らうとする私達の心も、苦しくて、せつなくて、そのくせいつも火照つてゐるやうなやるせないあこがれでふくらんでゐた。

私達は普通の少年のやうに、前途の希望に空想の虹をかけ渡すやうな少年ではなかつた。家庭の事情がさうした明るい、温かい夢を培つてはくれなかつた。陰湿を愛し、孤独をたのしむ少年であつた。しかし彼には豊かな文才があり、許されるなら将来は文学を以て……といふかなしい野心はあつたやうである。

或日、誘われるままに初めて友達の家に行つた私は、その屋根裏のやうな二階の狭い暗い部屋で、一体何を語り、何を教えられたであらうか。ほんに僅か切り開かれた窓からは重く低く垂れた六月の空が見え、空の下ではおそい東北の田植がはじめられようとして、あちらでもこちらでも、代掻きの馬が嘶いてゐた。どこからか運ばれてくる野茨のはなのにはひが、更に青白い少年の夢をかきたてた。

私の知らない、しかもむずがゆいやうな世界を彼はすでに知つてゐた。それは多く彼の読んでゐた小説の世界から移入されたものにせよ、十五六の少年としては、あまりに広すぎる世界を彼は持つてゐた。

彼は私に「破戒」を読めとすすめた。「春」を読めとすすめた。「家」を「かび」を「ただれ」を、そして「布団」を「若キエルテルの悲しみ」を読めとすすめるのであつた。更に彼はこの野茨の花の歌を示して、

私に歌を作れと勧めた。私は物に憑かれたやうに、それ等の小説を耽讀した。歌も作つて彼に見て貰つた。私は段々ませた少年となり、夢多き少年となり、時にひとり顔をあからめるやうなひそかなるたのしみをもたのしむ少年となつた。

私の本箱にその時借りたともなく、貰つたともなく遂に私のものとなつてしまつた「破戒」が大切に蔵されてあり、今日なほ歌の世界に足を踏み入れて、足掻いてゐるのも、思へば彼の使嫉によるのである。六月にさへなると、東北の重い空を恋ひ、野茨の花を想ひ、今はすでに亡きその友――Yの右の白い眼を限りなくなつかしく思ふのである。(「六月」 風土六七三)

向日葵は金の油を身にあみてゆらりと高し日の小さきよ

前田夕暮さんのこの歌を読んで、胸のひきしめられるやうな喜びとおどろきを味はせられた十六歳の日の私を今に忘れることが出来ない。

そろそろ青白い少年の夢にあこがれそめて来た私に、故佐藤嘲花は一冊の歌集「生くる日に」を貸してくれた。

歌には誠に初心であつた私にも、この歌集の随所から放たれる前田夕暮氏のにほふが如き色彩描写に酔はされて、一日呻き暮らしたものであつた。この興奮はなかなか醒めきれなかつた。……(「向日葵」 風土六六七)

これを読むと、『山原』巻頭の「海潮音」のあざやかな視覚描写が、前田夕暮から学んだものであることがわ

かるが、単なる写生ではなく、青木繁の「海の幸」（一九〇四年）の絵などから得た印象も入っているのではないだろうか。右の文章に名は見えないが、若山牧水の歌集もまた愛読書だったはずである。つづく「短か日」も同じ年の作であろう。

石仏三基ならびてわがいゆく山は薄の穂のみだれかも

どんよりと空の重たさでうてうと藪に人ゐて竹伐る音す

へ「藪」は、原文は竹かんむりだが、訂正した

軒の辺にまるく大きく向日葵の種つるされて日の短さよ

馬牽きて今朝も童子の行くが見ゆ山遠々に雪ふれりけり

へ「行くが」の原文は「行がく」

ほのぼのと草焼く煙山に見ゆ昼浅くして空はれにけり

送り来し兄の着物を着てみつつ裾長しなど思ふ冬の夜

吹きつゝの朝の嵐の強ければ渦まき鳴れる青の大樫

空深く渦まき光る朝嵐みつつ心のよりどころなし

自ら心寂しくなりゐたり嵐をやみて空のはるるに

昼深くややにひそまる風のなかほのぼの鶏のなく声とする

これらが数えどし二十一歳の作である。すでに形はととのい、掴むべきものはしっかりつかみ、おだやかながら、おのれの基調を見出している感じである。

※前号正誤 一〇頁一六行 感んぜ↓感ぜ 二三頁四一五行 知識人だけのもので↓知識人だけのもの

中国の詩人と仏教 (五)

1930.4.10.

原田憲雄

七、書写・諷誦

前回では、支婁迦讖の訳した『般舟三昧経』が、散文と韻文をまじえて構成され、韻文には、三言・五言・六言・七言の偈があることをお話ししました。

「般舟三昧」とは、梵語の *pratyubhanna-samadhi* の音写で、プラティユトバンナは「現在の瞬間に在る」、サマーデーは「精神集中」というほどの意味です。仏に会いたいと思うなら、その仏を念じて一日一夜ないし七日七夜、心を集中すれば、その仏が目の前に現れる、という修行法で、「仏立三昧」とも「観仏三昧」とも訳し、仏の例としては阿弥陀仏が挙げてあるものですから、浄土系の初期經典として重んぜられています。

さきに『道行般若経』を説明したとき、書写・諷誦が勧められていることを紹介しましたが、『般舟三昧経』でも、「四事品第三」にはボサツのなすべき行として、人を集めて仏のもとにゆくこと、人を集めて経を聴かせること、人が仏の道を学ぶよう教えること、仏の形像を作ること、經典を書写すること、常に仏の法を護ることなどが示され、「四輩品第五」では、居士、すなわち在俗の資産者のなすべき行として、常に仏寺で八閼斎をたもち、布施をなすように念ずることなどを教えています。「八閼斎」とは、在俗の男女の一日出家をいいます。

『道行般若経』も『般舟三昧経』も一七九九年に訳されたという記録があり、これが事実かどうかについては疑問もありませんが、その前後であったことは確かなようです。そうして十二、三年後にはこれらの事が「居士」によって大規模に実行され、学者が「確かな資料」とする正史の『後漢書』や『三国志』にも記される

のです。

後漢の末の乱世については、例の小説やテレビの『三国志』でよく知られているので、くくだ説明することはいらないでしょう。そのころ徐州の刺史（しし、政務監督官）だった丹陽出身の陶謙（とうけん）は、「黄巾（こうきん）の乱」を鎮圧し、董卓（とうたく）の乱の時も、たえず間道から朝廷に貢献したので、安東將軍・徐州牧・潁陽侯（りつようこう）に昇進し、徐州はもともと豊かな土地として、長安や洛陽方面から戦乱を逃れた避難民が集まり、賑わっていました。この前後に笮融（さくゆう）という人が数百の流民の隊長として、同郷人の陶謙を頼って来て、力量が認められ、広陵など三郡の食糧運輸の監督を任されます。ところが笮融はこれらの食糧を取り込んで寺を建てたのです。『後漢書』の陶謙の伝によると、

大いに浮屠の寺を起す。上には金盤をかさね、下には重楼をつくる。また堂閣周回して三千人を容（い）るべし。黄金の塗像を作り、依（かざ）るに錦綵（きんさい）を以てし、浴仏することに、すなわち多く飲食を設け、席を路にしき、その食に就き、観る者ありて、まさに万余人。

『三国志』を参照すると、「浮屠の寺」というのは塔を中心とする寺のことらしく、仏の銅像に金の箔をおき、錦の衣を着せ、塔の頂きには九輪の銅盤が聳え、塔は幾層かの重楼で、塔をめぐる閣堂があり、灌仏が行なわれ、ここに集まる者は仏經を読むことを求められたが、それ以外は人種・男女・階級その他の差別なく飲食の供養を受けえたようです。

この営みも長くは続かず、一九三年に曹操の軍が彭城を攻撃して陶謙を破り「およそ男女を殺すこと數十万人

鶏犬も余すなく、泗水これがために流れず」（後漢書・陶謙伝）という状況になりました。笮融は徐州が危なくなつたので男女一万人、馬三千匹とともに広陵に逃れ、太守趙昱（ちよういく）に迎えられたが、趙昱を殺して略奪し、ついで豫章の郡守を殺してその城に入り、のち揚州の軍隊に破れ、逃走中に殺された、ということですが、客として迎えてくれた趙昱を殺したというあたりから後のことが無残なので、笮融に対する評価が厳しく、かれの仏事も、人気集めのための策謀にすぎまいと見られています。

その推測はかなり当たってはいそつではありますが、ここであえてかれのために弁護してみましよう。

まずかれの生涯を伝えるのが、學者たちによつて「確かな資料」といわれる「正史」ではありませんが、「正史」は実は「体制側」の歴史家の記録したもののなのです。かれらは体制からはみだす者に同情をもたない傾向があります。道教の「革命軍」ともいふべき黄巾の徒を「賊」と呼んでいるのがその一例です。皇帝の軍隊に刃向かう者は、旧中国では「賊」と呼ばれてもしかたはないのですが、それなら当時、幼い皇帝を擁立していた曹操に對立するものは劉備であろうが孫權であろうが「賊」であるわけですが、そうはあつかつていないところ、かれらのたてまえも揺れ動くのです。

歴史家はおおむね、儒教以外の宗教・信仰に對しては、疑わしい目で見ると、あるいは冷淡でした。だから笮融の仏事に對しても、冷やかすような書き方をしています。けれども、中国の歴史が始まつて以來この時まで、神話の堯舜などはともかく、事実として、一般の民衆に、笮融の建てた佛寺ほどの規模の施設を開放した人がひとりでもいたでしょうか。人種・男女・階級などにかかわりなく、まったく無差別に、万人という単位の人達に



飲食を提供した例がありましたでしょうか。団体としても、個人としても。

笮融は、陶謙の信頼を裏切り、広陵など三郡の食糧を横領して、この事業を行なったという点で非難されるのでしようが、その食糧は、いずれ民衆から税として取り上げたものです。それを皇帝や側近の少数に献上するのと、多数の民衆に還元するのと、どちらが良いかということになれば、民衆に還元するほうがよいという意見があってもよさそうですが、いわゆる歴史家の、体制的な思考には、そんな意見をいれる余地はなさそうです。

広陵での裏切りは、ひどいものですが、しかしこれも、果たして『後漢書』に書いていることが事実なのかどうか。『三国志』の注に引かれた謝承の『漢書』によると、笮融が広陵にいったとき、趙昱の軍隊が阻止したため、戦闘となり、笮融の部隊が勝ち、趙昱が死んだのだということです。これなら裏切りではありません、話としてはおもしろくないにしても、いずれが正しいかは、今となっては確かめようがないのです。

諸葛孔明は正義の人とされ、「出師の表」を読むと、涙がこぼれそうになります。しかしかれは大戦略家でした。その戦略のなかには、わたしたちのような凡人からみて裏切りとしか感ぜられない政治謀略や、軍事行動がたくさん含まれていたはずですよ。わたしたちのような者がよくよとこだわる約束などは「尾生の信」、つまり小人女子の信頼関係〃として、顧みもしなかったでしょう。そういうしたたかな英雄でなければ、あの曹操のような抜目のない英雄と、対等に、あるいは凌いで、闘えたはずがありません。

笮融は經典の教えに従って、素直に仏寺を建て、民衆に供養し続けたが、したたかな英雄たちの間で翻弄されているうちに「大策謀家」に仕立て上げられていた、とも見られないわけではありません。戦前の大本教の出口

王仁三郎氏が、強圧されたころ社会からどんな評価を与えられていたか。これなども、智融の評価に参考とすることができようかと思うのです。

支婁迦讖の訳した經典は、訳されたのは、後漢末から三国にかけての戦乱の時代でしたが、信徒は經典を日々に誦（とな）え、覺（おぼ）え、誦（うた）い、書き写し、火のなか、水のなかでも、それを守ろうとしました。一般の詩や文も、作られると、今のわたしたちが考えるよりずっと早く、広い範囲に、伝達されたようですが、しかしそれは知識人の間だけです。ところで知識人は、自分の作品は大切にしますが、「文人あい軽んず」といつて、他人の作品はあまり尊重しない傾向もあり、まして戦乱ともなれば、自他共に詩文より身が大切なのは人情でしょうから、詩文は失われることが多いのです。ところが、仏教經典は、文字の読めない人でも信徒であれば大切にし、經典の文句は、意味が分からなくても暗誦するように指導されていて、声に出して唱えるのですから、三言・五言・六言・七言の偈は、やがて中国の人々の心に、親しい音節として根づいていったはずで

といても、三言の詩は、寒山の作品のなかにまじり、六言の詩は王維などがときたまに試み、七言の詩も唐代になって盛んになる、といった調子です。支婁迦讖の翻訳から四、五百年も後のことです。それを仏教徒の經典韻誦と結び付けるのはこじつけのように感ぜられるかもしれません。

しかし、過去の中国の官僚・知識人は一般に驚くほど保守的ですから、民衆の間で語られ、歌われているものでも、すぐに飛び付くようなことはしません。中国の詩人は、ほとんどすべて、官僚または官僚予備群の知識人です。だからかれらもまた一般に保守的でした。詩の文体を変えることに消極的なのは当然です。

こんなことをいうと、わたしが、中国ないしは中国文学に好意をもたないように受け取る向きがあるかもしれませんが、そうではないのです。わたしは好意をもたない対象を研究するために一生を費やすほどの物好きではありません。好きなればこそその長いつきあいです。しかし、アバタもエクボと言いくるめるのでは、言うのもつらく、聞くほうは迷惑でしょう。アバタはアバタ、エクボはエクボと知ったうえで、アバタにもエクボにも理解の道をつけてゆくのが、研究者の務めだろうと思うのです。

中国の旧文学は保守的でした。いまのだって考えようによっては保守的だといえましょう。その保守性が、優れた詩文を育て、反面、停滞をもたらしました。中国の詩人と仏教のつきあいも、仏教のほうから積極的で、詩人のほうからは消極的だったように観察されます。これが一般の風潮です。しかし美しいもの、すぐれたものに敏感なものも詩人です。すぐれた詩人は、おのれの好まぬものなかに、美しいもの、すぐれたものを見出せば、それをおのれの詩文に活かそうとするものです。ただ、かれらは、日本の多くの人のように新しいものではなくてもすぐ身につけ、外国語を自国語よりたくきん口にして得意がるのは、恥ずかしいことだとする古雅な審美観を大切にしますから、かれらの詩文から外来の仏教の痕跡を捜し出すのはむづかしいのです。つまりそつと使つて使つたことを人に告げないのです。詩文に限らず、研究の世界でも、中国の学者は、他国人の研究を参照してもめつたにそのことを自分の論文に表現しません。「中国人の研究以外は参照しない」という日本の研究者がいますが、中国の学者からすれば理解を絶するのではないでしょうか。わたしなども誤解している面が多かろうと恐れますが、違つたところは違つたものと理解した上で、良いところを学んでゆきたいと思うのです。

岡山県邑久郡久町が瀬戸内海に臨む虫明湾に小さな島がある。長島である。この島にらい治療の国立療養所が二つある。一つは愛生園、いま一つは光明園で、光明園長は主人の弟である。その原田禹雄（のぶお）奈緒美（なおみ）夫妻から、春の島を見にきませんかと誘ってもらい、三月下旬、娘の道子と二人で久し振りの小さな旅ができた。長島を訪ねるのは二十数年ぶり、わたしは三度目、道子は初めてである。

JR赤穂線の日生まで行ったら、迎えのタクシーが来ていて、十分ほどで島に入る。前に来た時は船で渡らねばならなかった海に橋ができた。瀬溝海峡、といっても、狭いところは巾三十メートルほど、そこに邑久長島大橋がかけられた。昨年五月九日開通し、わたしたちは家で、この様子をテレビニュースで見ながら「よかったよかった」とただ感動していた。しかし聞いてみるとその三十メートルが大変だった。架橋に選んだ場所一帯が鰯などの漁場だから、工事で海を汚したり、橋脚で運航の妨げをしたりして、漁業に悪影響を及ぼしてはならない。それで兩岸に打ち込んだ橋脚から山の形に渡したケーブルで、長さ一五〇メートルのコンクリートの橋を吊り上げている。ランガー式というらしい。発起から完成まで、驚くほどの綿密さと慎重さで、交渉、実験、会議が繰り返されたという。

禹雄夫妻の住む官舎は、海を見下ろす丘の上の赤屋根の二階建てで、昭和十三年、園創立当時のものだが、夏目漱石かだれかの家のようで、二人が住むにはずいぶん広く、海風にさらされ、襖などはきしんでいる。官舎は

鉄筋のマンション式のものに建て換えつつあり、古いのは空家になっているものもあるようだ。

着いたのが土曜の午後だったので、夫妻そろっての出迎えで、お茶がすむと、さっそく愛生園を見学させてもらう。いたるところで海が見える。山桜が早くも咲き、ミツバツツジが紫がかったピンクを、アカシヤが粟粒のような黄色い花を噴き上げるように咲かせていた。

「亜土（あと）が来たとき、このアカシヤを見て、きれいやなあと感心しました」と禹雄さんは、わたしどもの長男が来た時のことを思い出している。

曇り空でいくらか暗いものの、海はそれでも静かな光りをたたえている。橋が開通して活躍の余地もすくなくなっただのか、園の船が入江に繋がれ所在なさそうに浮かんでいる。岸べに古い建物がある。

「むかしは船から上がった患者が、あの建物で検診を受け、身につけている物は取りあげられ、園の着物にきかえたのです」

脱走や無断外出を防ぎ、外部から酒などを買わせないためだという。所持金は通帳で渡され、作業賃金などは園内通用貨というボール紙の紙幣で渡され、その両方で、売店で買物をしたらしい。岸べの建物はもちろん今では使われない。蔓草などが登る無言の廃屋である。

車は愛生園の中心部に入り、万霊山で下りて納骨塔に礼拝した。白いドームの上に九輪がついて美しい。まわりにはたくさんの種類の木が植えられ、それぞれに名札が付いている。所々でラジオの放送が流れるのは、視覚障害者誘導のためだそうである。空は雨の気配ですこし暗く、女の人がひとりお参りしていた。

中央の診療施設をみて、高等学校に行った。らしい患者のための高校は全国で愛生園にしかなくて、入学したい人はこの園に移籍してきたが、今では患者が次々に治癒して、入学する者がなくなったので、昨年閉校したのだそうである。ついで公園の傍で車を降り、坂を上り、立派な建物を見た。その庭のすこし高いところに、一群のミツバツツジが色濃く咲いて、そこに碑があり、

必ずゆきて見む

ふるさとの守礼門

龍潭池

首里の石畳道

と刻まれているのが心に残った。わたしがピシヤと呼んでいた灌木が多く、白い花をびっしりつけている。これはヒサカキというのだと禹雄さんに教えられてそうだったと気がついた。来た時と同じようにアカシヤのいっばい咲いた道を、右に左に海を眺めながら、火葬場の山桜の前を通過して、官舎に帰った。

官舎の玄関の横にヤブツバキがあって、赤いはなが薄緑の苔の上にはほとほと落ち、そこが明るく見える。海に向かった裏側の庭に、大きな山桜が二本あったが、花が遅いらしくてまだ蕾がかたい。道子と交代でたがいに写真を撮った。猫が三匹、わたしたちに驚いて逃げた。このあたりに住みつき、奈緒美さんが可愛がって、いつも食べ物をやっておられるらしい。静かである。人がどこに居るのか影も見えない、声もしない。それでいて空気がなごんでいて、草木も海も空も安らかに息づいている感じがする。子どもの頃わたしたちにやさしかった自

然の、あの夕暮れの匂いを思い出す。

夜は、海の幸をたくさん頂いて、遅くまでしゃべり、〇時をすぎてから二階で休ませてもらった。雨が降りだし、風がつのり、一晩中、嵐のような音がしていたが、朝、六時ごろに目を覚ますとすっかり晴れていた。海へ出る船の音がポンポンと響いてくる。この島では夜が明けるともうウグイスが鳴いている。

外に出ると、雨の後とも思えないくらいさわやかな朝だった。海の方へ、急な坂を下ると、医員の官舎が二軒あり、まっ白なハタンキョウの花が咲いていた。タンボボやムスカリのひとり生えが海の風に揺れている。犬がこちらを見たが吠えなかった。

引き返して、團長官舎を過ぎ、小高い山に登ってゆくと、備前の国守だった伊木家の墓石が九基ほどあった。見上げるばかり大きく、夫婦のものは一対づつ土塀で囲まれていたらしいが、塀はほとんど崩れ、部分がすこし名残をとどめ、草や雑木が覆うように繁る。墓碑は邑久町の重要文化財に指定され、その立札だけが新しく光っている。埋葬墓は本土の寺にあるというから、これは供養墓なのだろうか。前に小さな法華塔がある。人がよく通うらしく、それぞれの石碑への踏分け道が付いていた。近くでウグイスがしきりに鳴く。やさしいその声さえ大きすぎ、あとはわたしの足音だけである。

山から海の方へ降りてゆくと、坂の下に古い職員官舎が何軒も見える。三十年ばかり前、この療養所へ、若い医師として赴任した禹雄さんの一家、夫婦と幼いむすめ二人は、あの官舎に住んだのである。むすめたちは、雨の日も風の日も、舟でわたり、長い道を、小さな手をつないで、幼稚園や小学校に通った。上のむすめが中学に

入るころ、禹雄さんは光明園から愛生園に転任した。そのとき奈緒美さんはむすめを連れて京都に帰り、二人を育て上げて結婚させ、ふたたび島に戻ったのである。その間に禹雄さんは、愛生園から光明園へまた転任し、長い独り暮らしを続けていた。

わたしは坂の上に立ち、瀬溝のあたりを眺めながら、長男と長女をつれてあの海で泳いだ日のことを思い出しながらぼんやりとしていた。ふと、立っている左手の高い雑木を見上げると、クヌギのような膚の枝の先に、三センチくらいの果球をいっぱいつけている。美しいなあと思つて見ているうちに、はっと気がついた。これこそヤシャブシではないだろうか。これを見たいばかりに何度も植物園に通つた。そしておしまいにはわかつたことは、いま植物園の一部を改修するためにヤシャブシはみんな引き上げ、どこかにかためてあつて、一般には見る事ができない、ということだつた。「ああ、これこそヤシャブシに違いない。どうしよう、どんなによく見ておいても憶えきれない、また見にくることもできない」とにかく持っていたカメラで二枚ほど写した。そのとき坂の下から女の人が二人現れた。わたしが写真を撮るのを見たのだろう、その木の下まで来ると、見上げながら、誰かがヤシャブシの実を持ってきてどこそこへ埋めたので、他のだれそれが何とか言つた、というような話をし、二人は笑つた。やっぱりヤシャブシだとわたしは嬉しくなつて、思わず振り返り「おはようございます」と挨拶をした。二人もゆったりした調子で挨拶をかえされた。日曜出勤の職員だつたのだろう。

いま、わたしは二枚の写真を机の前に並べて見つめている。にじむ空色に枝さし交わしていっぱい広がる小さな写真から、遠く交響樂が聞こえてくるような気がして、あの時の嬉しさが甦ってくる。



朝食の後、夫妻に案内してもらって、光明園を見た。自動車道路をすこし歩き、新しい鉄筋の職員官舎の間にはいり、畑地の中へ下りた。果樹の世話をしている人がいた。草藪を通り抜け、かつての患者地区へ出た。患者はみんな新しい建物に移り、「藪池軽症夫婦地区」と呼ばれた赤い屋根の十数棟ならぶこの村は空っぽである。各棟には植物の名が付けられていた。海からの風が吹き、明るい陽の中で、植えたまま残された花が揺れている。ここに、人々がどんな気持で住んだのか、わたしたちには想像してみるほかはないが、静まりかえった明るさの中に、残された暮らしの品の端々に、何となく胸にこたえるものがあつた。今でも時々この家に帰り別荘のように使っている人もあると聞いたけれど、その人達にも無量の感慨があるのだろう。

続きにグランドがあり、すぐ傍に波の打ち寄せる小さな浜辺があつた。そこでしばらく貝殻を拾い、坂を上がつて、患者自治会館のある方へ行つた。西洋ツバキが紅白、ピンク、みごとに花を咲かせている。同じところの光明会館の傍に納骨塔がある。愛生園のよりいくらか小さく、黒っぽく、古く、みえる。海を見下ろすところに入り、視覚障害者誘導の音楽は、光明園では童謡である。奥の方に仏教各宗のお堂がある。わたしは日蓮宗の建物に入つて礼拝した。昭和三十四年に建つたということだが、新築かとおもうほどよく掃除され、金具もよく磨かれピカピカ光り、花がりっぱに生けてあつた。お堂全体が一点の曇りもないという感じがした。

診療棟に向かう途中、入園者に出会つた。ひとりは日蓮宗のお堂のお守りをしている人だと、後で聞いた。海に向かつて下り、畑の中をゆくと、鶏や雉子を飼っている人があり、雉子は特に鋭い顔付をして、狭い小屋の中を歩きまわっている。飼料にするための野菜が植えられ、大根の、土からほとんど伸び上がつてしまつて、白い

身を空中にさらしているのが、異様だった。飼い主は、手先が不自由でこまかい仕事ができないので、卵などは網ですくわなければ掴めないのだった。だが、盆栽も作っているのだそうである。「卵をあげましょう」といわれて、禹雄さんは遠慮していたが、あまり断わるのもというふうで、幾つかもらった。もとの道へ上がると、軽症の夫婦棟に出た。植木の鉢などが並び、こまごまと人の住む日常がうかがえる。そのどこかに、子どもの頃に見た風景のようなどかさと、怪しさがただよっている。住む人のことを思うこちらの気持の反映でもあろうか。病院は建て直された新しいもののように、外来の待合室は広く、そこからそれぞれの診療科に分かれ、治療棟と病棟があり、必要な患者は入院できる。心臓病で入院している人の住まいを見せてもらったが、壁面がどこも収納庫になっていて、部屋には邪魔になる家具がなく、すっきりと、不自由な人にも動きやすくできている。住居棟にもスチームが通り、適当に暖房されている。麻痺した患者が火傷するのを防ぐためらしい。病院の続きに、一棟だけ古い建物が残っていて、ここに團長室があり、床はすこし傾き、天井には雨漏りの染みができている。他の建物が新しくなったなかで、この棟だけが創建当時の光明園の様子を語っているのだろう。むかしの木造の学校のように薄暗く、懐しい感じがする。調理場などには、日曜にも出勤して働く人があり、白い上っぱりをつけた人の姿が見えた。

午後は光明神社へ行った。奈良時代、聖武天皇のきさき、光明皇后が千人の垢を洗う願を立て、千人目がらい患者であった。皇后がいとわず洗われるとらい患者は仏の姿を現わした、という伝えがあり、この神社に神として祭る。光明園は、もと大阪で外島保養院といったが、昭和九年の室戸台風で壊滅し、十三年、長島に新たに建

設し、皇后の名に因んで光明園と改称し、療養を再開した。小さいけれどもすっきりした神社で、境内はきれいに植樹され、神の庭として整然としている。前方に突き出て海の見える位置に、精神科医として奉仕された神谷美恵子先生を記念する「神谷亭」が、白いきのこの形をして立っている。先生の死後、夫君が香典を寄贈され、それがこの亭となった。光明園はもとより、愛生園の人たちもここにきて先生をしのぶそうである。眼下に光明園が一望され、瀬戸内海の遠くに小豆島などの島々が見える。ウグイスがしきりに鳴き、ホオジロがさえずる。ほんとうに静かである。こんな日があるうとは、思いがけない幸せであった。参道を下りてくると、陽だまりにワラビが二本はえていた。

長島に三日目の朝、出勤する禹雄さんを見送り、しばらく奈緒美さんと話し、用意してもらったタクシーで、わたしたちは長島を後にした。「今生の別れ」でなくても、別れはいつも寂しい、わたしたちは何度も手を振って、後を見ていたが、じきに道は曲がり、奈緒美さんは見えなくなった。

前にわたしが行った時と比べて、長島はずいぶん変わった。生徒のいなくなった高校、ゴーストタウンのような患者地区、入り江に浮かんで用のなくなった船、造成された裸の土地に立つ鉄筋コンクリートの官舎、……。確実に機能する部分と、脱ぎ捨てられたままそこに残されている物と、保存され人々の心の拠りどころとなっているものが、それぞれに意味をもって、現在の長島がある。これから先、どのように変わるのだろうか。

長島から帰って、わたしは『創立八十周年記念誌・国立療養所邑久光明園』『わが国のらい対策の推移』（原田禹雄）を読み直してみた。

現在は、らいは治る。隔離の必要はない。療養所は、入園者の去就について、一切の干渉はしていない。自宅に帰りたい人は帰ってもよいし、療養所に残りたい人は残ってもよい。どこへでも、ゆきたいところがあれば、国外であれ、国内であれ、いつでも自由に行ってもよい。これが、療養所にいる人たちの実態である。ではどうして、入園者は、大喜びで帰ってゆかないのか。

かつてらいを病み、眼も手足も不自由となり、もはや一般社会へ復帰することを断念した人も少なからず存在していることも、また、まぎれもない事実である。だが、これらのほとんどの人たちは、らい自体は治療し、後遺症としての不自由がのこっているのであるが、あくまで、らい施設に残っているかぎり、らい患者と自らも思いこみ、外部の人々もそう思っていることは、奇異な感じがする。

わたしは療養所で何人かの入園者に会った。らいが治ったことは知っているから、ともに話し、その人の住まいに入ることも、まったく気分的な差も感じない。それなのに入園者のことは「らい患者」だと思い、そのことに対する反省すらかすかである。これは無知無関心にすぎないのではないか。らいを病んだ人の苦惱と、それを見取ってきた人たちの辛勞の積み重ねが、らいの治療にまで漕ぎつけたのであることに無関心でいるなら、これから先にわたしたちが抱えるたくさんの問題にも、無関心であり続けることになるだろう。

帰ってから、友人に、療養所を見せてもらったことを話したら、そのひとはこんなことを話してくれた。戦後間もない頃、その人の妹は小学生だった。手足の霜焼けがひどく、靴下が足に貼り付いて、湿らさなければ脱がせることもできない。あまりひどいので、有名な大病院に連れていったところ。らいだと診断された。母親は口

もきけず、蒼白になって帰り、悩んだ末、とにかくもう一つだけ診てもらおうと、京大病院の皮膚病特別研究施設（特研）へ連れていった。そこで「これは、らいじゃない。ただの霜焼けですよ」と診断されたのであった。

「母は、妹を連れて死のうと思ったと言っていたわ。もし特研で診てもらわへんかったら、母は妹と心中してたやろなあ」と友人は言った。そういえば、わたしの妹にも、靴下が足に貼り付いて取れないのがいた。しかしわたしたちは霜焼け以外の何ものでもないと考えていた。理由は、らいは遺伝でありわたしたちはその筋ではないから、らいにかかるはずがないときめていたからである。明治三十年ベルリンで第一回らい学会がひらかれ、わが国から北里柴三郎博士が出席した。この会議の結論の一つとして「らいは感染性の疾患のひとつで、遺伝性ではない」という。それなのにわたしたちは昭和の二十年を過ぎた頃にも、遺伝だと信じていた。いまでもそういうことを持ち出して差別しようとする向きもある。知らないことと、知ろうとしないことは、いつも悲劇や喜劇の引金になっている。先の話の友人のお母さんは、戦争中、看護婦だった。だから一時、仰天しても、あとさきを誤ることがなかった。当の妹さんは成人した後、ずっと京大病院の検査室に勤務している。このような例をみても、らいという病気がいかに怖れられ、まちがった考えで人々を苦しめてきたかが分かる。

国がらい対策を具体的に始めたのは、明治四十年以降である。明治改元以来、明治十九年までは、個人病院設立期といってよいであろう。救済を目的としたものも、ないではなかったが、営利を目的としていたものの方が多かった。……明治二十年から三十九年まで、この時期を、宗教病院設立期とよぶことができる。宗教といってもほとんどがキリスト教であった。（以上、『推移』）

明治三十九年、山梨県身延に日蓮宗の僧綱脇龍妙師の手で深敬病院が建てられる。これがわが国での唯一の仏教らしい施設だそうである。らしい予防法ができ、国立療養所が次々つくられたが、その後、たびたびの戦争によって危機にたち、多くの犠牲者を出しながら、大戦の終りを迎えた。

戦後、わが国ではスルフォン剤が治らい薬に採用され、長らく「不治の病」とされてきたらいが、「可治の病」となった。更に：：チオ尿素剤なども用いられ、治らい効果をあげた。

戦後急速に化学療法が進んだが、治療経過中のさまざまな反応がおそれられ「新薬はこわい」とされ、服用させるのがまた大変だったようである。

私どもが伝えたいことは、らいを病んだ人にとっても、らいを病んだ人をもとる私どもにとっても、らいの治療は、決して、或日突然、どこからかふらりと訪れるものではないということである。まるで泥まみれのような苦しいらいとのたたかいを、入園者も職員も続けてきたのである。治らい薬の進歩によって、らいは治る病気となった、という表現だけでは決して伝えられない現場の姿が、幾分なりとも伝えられれば幸甚である。そして、このようにしてやっとなつかまえられた「らいの臨床的治療」という事実には、社会の人々は、どのように対処されるのか、とあえてたずねてみたいのである。(以上『記念誌』)

わたしはこれらの記録を読んだとき、この泥まみれのたたかいを知り、阿修羅や不動明王の忿怒の相を理解することができた。この修羅場に身を投げうってたたかった人たちに、どこからそのような大きな愛が生れて来たのだろうかと思う。「小島の春」を書いた愛生園の女医小川正子先生の墓の碑陰には、

《生きてゆく日に愛と義の十字路に立たば必ず愛の道につけ》  
と刻まれているという。

愛とは、自然に生れてくるものではない。特別の人だけが持ち合わせているものでもない。自分でそだてるものだろう。真実を知り、信ずるところを行なおうとする勇氣と決意なのだということを教えられる。

らいは治った、泥まみれになってたたかった人たちはらいを征服した。そのために協力を強いられた家族や、犠牲になった生命もたくさんあった。この事実をどう受けとめられるのかとたずねられても、わたしたちには答えることができない。いま、泥の中から立ちあがって、こちらに呼びかけている人たちを、わたしたちはしっかりと憶えていたろうか、ずっと見守ってきたと言えるだろうか。ごくろうさまと言って迎えるだけの準備をしておいたろうか。みんなのために戦ってくれている仲間をおきざりにして来てしまった。あの白い大橋は、園の中の人々のわたしたちに対する問いかけなのだ、いま、わたしは思っている。

## 如来はこう見る

—法華經巡礼 45—

1990.4.23.

原田 憲 雄

世尊の、シャーリフトラに対する答えはつづく。

Q118. そこでシャーリフトラよ、如来はこのように見る——わたしこそこれらの衆生の父だ。わたしによってこの衆生は、このような大きな苦の塊から解放されなければならぬ。この衆生に、無量のふしぎな仏の知

識の楽しさを与えなければならぬ。衆生が遊び楽しみ夢中になり戯れることができるように。

latra śāriputra tathāgata evaṃ paśyati / ahaṃ khalv eṣāṃ satlvānāṃ pitā / mayā hy ete sattvā  
asmād evaṃ-rūpān mahato dukkha-skandhāt parimocayitavyā mayā caiśāṃ satlvānāṃ aprameyam acint-  
yam buddha-jñāna-sukhaṃ datavyaṃ yenante sattvaḥ kṛdīsyanti ramīsyanti paricārayīsyanti vikr-  
īdītāni ca karīsyanti ॥

3-20. そこでシャーリプトラよ、如来はこのようにみる——わたしは知力があると考え、神力があると考え、正しい方便によらず、衆生に如来の知力や自信を聞かせても、衆生はその教えによつては出離することにならないだろう。なぜなら、衆生は、五つの愛欲、三界の快樂にふけり、生・老・病・死・悲哀・愁嘆・苦惱・憂愁・惑乱から解放されず、焼かれ、煮られ、熱せられ、焦がされているからだ。屋根も庇も朽ち古びた家のような三界から逃げ出さなければ、どうして仏の知識をうけとることができようか。

latra śāriputra tathāgata evaṃ paśyati / saced ahaṃ jñāna-balo 'smīti kṛtvā rddhi-balo 'smīti  
kṛtvā' nupāyenaśāṃ satlvānāṃ tathāgata-jñāna-bala-vaiśāradyaṇi saṃśrāvayeyaṃ nante sattvā ebh-  
ir dharmair nirvāyeyuh/ tat kasya hetoḥ / adhyavasitā hy amī sattvāḥ pāccasu kāma-guṇeṣu trai-  
dhātuka-ratyāṃ aparimuktā jāti-jarā-vyādhī-marāṇa-śoka-parideva-dukkha-daurmanasyopāyāśeḥhyo  
dahanante pacyante tapyante paritapiyante/anirdhāvītās traiddhātukād ādīpta-jirṇa-paṭala-kāraṇa-  
niveśāna sadrśāt katham ete buddha-jñānaṃ paribhoṭsyante ॥